

いのちの繋がりを伝える ——有限会社土遊野が実践する循環型農業——

主席研究員 小針美和

中山間地域農業の可能性を拓きたい

有限会社土遊野(以下、「土遊野」)は、富山市中心部から車で50分ほどの土地域にあり、里山をフィールドとした持続可能な有畜複合循環型農業に取り組んでいる。代表取締役である河上めぐみ氏の両親が40年前にこの地へ移住して農業をはじめ、現在は30haの有機米栽培と3,000羽の平飼い養鶏を中心に農畜産物や加工品の生産・販売を行っている。

土遊野が大切にしていることのひとつが「いのちの繋がりを伝える」ことである。里山には人と自然が共生しながら暮らしてきた歴史と知恵がある。河上氏は、その価値を消費者とも共有するため、良質な農産物を届けることだけでなく、農業体験や情報発信にも積極的に取り組んでいる。こうした実践には、河上氏の「日本の里山、中山間地域が持つ可能性を拓き、次世代へ伝え広げていきたい」という思いも込められている。

これらの取組みの土台をなすのは、土遊野が「まあいい優しい循環」と呼ぶ、有機米づくりと平飼い養鶏を組み合わせた有畜複合経営である(第1図)。

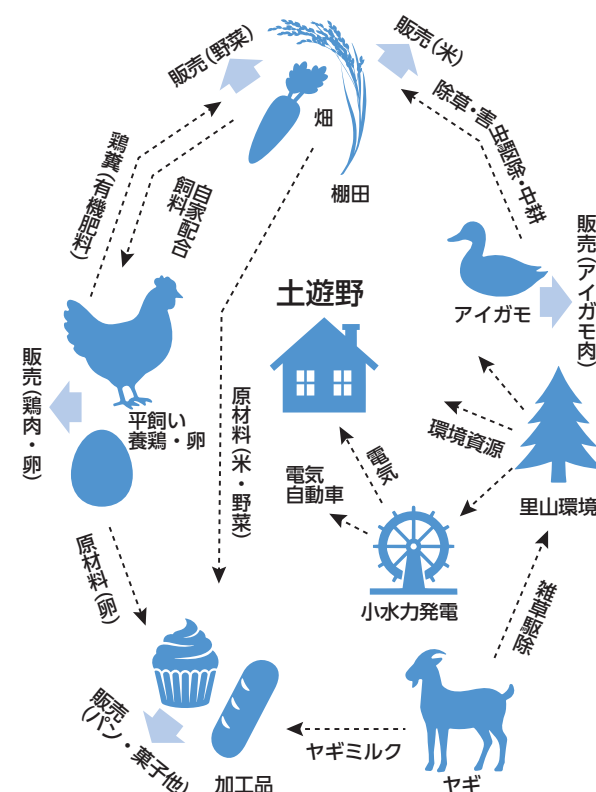
多様な命を育む棚田の有機米づくり

土遊野の田んぼには、10km以上離れた森から引かれた清らかで冷たい水が流れ込んでいる。約180年前に水路が開削されて以来、先人たちはこの山あいの小さな田んぼで工夫を重ねながら米づくりを続けてきた。平野部の大区画は場と比べると作業効率の面では不利な条件にある。しかし、森林の養分を含んだ清冽な水、棚田特有の昼夜の寒暖差、そしてマグネシウムを多く含む粘土質の土壌、この地域には良質な米を育むための条件がそろっている。

土遊野ではその環境を活かし、農薬を使用しない有機栽培を実践している。除草はアイガモ農法や機械除草により行い、肥料には発酵鶏ふんを利用している。後述するように輸入穀物や抗生物質に依存せずに鶏を飼育しているため、肥料にも薬剤由来の成分が持ち込まれない。

訪問した6月下旬、機械除草で管理されている田んぼには、ヤゴから羽化したばかりと思われる小さなトンボが見られた。まだ遠くまで飛び回ることなく、一見すると気付きにくい、水面近くや稲株の根元に目をこらすとその姿が数多く確認された。農薬を使用しない環境であるからこそ、多様な昆虫や小動物が生息している。

第1図 土遊野の循環型農業



資料 有限会社 土遊野パンフレットをもとに作成

興味深いのは、有機栽培の田んぼでも、アイガモ農法のは場と機械除草のは場では生き物の営みが異なることである。アイガモは雑草とともに虫も餌とするため、アイガモ農法のは場では、肉眼で見える昆虫の数は機械除草のは場より少なく感じられる。一方で、アイガモのふん尿は分解されて肥料養分となるほか、水田を泳ぎ回ることにより生じる攪拌作用が稲への刺激となるなど、稲の生育を促す側面もある。

管理方法が異なれば、田んぼに形成される生態系も異なる。そこには、単に生き物の数ではなく「いのちの種の数」を大切にし、多様な命が共生する環境を育もうとする土遊野の農業観が表れている。

鶏を育て、田んぼを育てる平飼い養鶏

こうした考え方は有機米づくりとともに養鶏にも貫かれている。土遊野では先代から採卵鶏を飼養し、現在では肉用鶏も生産しているが、いずれも“鶏を健康に育てる”ことが根底にある。例えば肉用鶏では、一般的なブロイラーが45日程度で出荷されるのに対し、土遊野は自社で卵からふ化させたひなを平飼いで6か月以上かけて育てる。抗生剤やホルモン剤にも依存しない。

また、飼料づくりにも独自の工夫がある。輸入穀物は使用せず、土遊野で生産した米、国産麦、大豆に加え、酒かす、富山湾の魚のアラを加工した魚粉、里山の野草などを季節や気温に応じて配合し、発酵させて給与している。

鶏舎管理にも鶏を健康に育てるという考え方が貫かれ、床土は常に発酵状態が維持されるよう管理されている。地面には土や飼料の食べ残し、鶏ふんが混ざり合うが、鶏自身が足でかき混ぜることで発酵が進み、発酵が不十分な場合はもみ殻や落ち葉を加えて調整する。

ふかふかの床土は鶏にとっても快適な生育空間となり、病気の予防や健康な生育にもつながる。その床土や鶏ふんは、有機米づくり

を支える良質な肥料として再び水田へ還元される。鶏の健康を支える環境づくりが、そのまま田んぼを支える肥料づくりにもつながっている。

地域資源活用による循環の深化

このように、土遊野では従来地域資源を活用した循環型農業を実践している。そして近年の飼料や肥料を巡る国際情勢の変化や価格高騰は、こうした循環の価値を改めて認識させる契機にもなっている。

国産資源、とりわけ地域資源を活用している土遊野の経営は、一般的な農業経営に比べて市況の影響を受けにくい。しかし、製造コストの上昇により魚粉の値上げが避けられなくなるなど、従来どおりの調達を前提とすることが難しくなりつつある。

魚粉は鶏に動物性たんぱく質を供給するうえでも重要な飼料原料であり、今後も活用していきたい資源のひとつである。一方で、将来にわたり循環型農業を継続していくためには、その基盤となる資源を安定的に確保し続けることが不可欠である。そのため土遊野では、地域に活用の余地が残されている資源がないか探索を続けている。例えば、農場で発生する野菜残さや水田・畦畔の雑草などを乳酸菌で発酵させて飼料として活用することの可能性を検討している。

地域資源を最大限に活用しようとする姿勢そのものが、土遊野の掲げる「まあいい優しい循環」をさらに深めるものであり、河上氏が目指す「いのちの繋がりを伝える」を支える営みのひとつである。こうした取組みは、土遊野が実践する循環型農業をより強固なものにすると同時に、食料生産のレジリエンスを高める“資源の確保”にもつながっている。

今後、どのように循環の輪が深まり、里山に息づく「いのちの繋がり」が未来へ受け継がれていくのか。土遊野の挑戦に引き続き注目していきたい。

(こばり みわ)